



問題行動の多い子どもへの指導法

文 | toshi
イラスト | 秋野 純子



退職し初任者指導に携わらせていただいて十年になるうとしています。初期に担当した初任者はすでにベテランの域に達しています。学校の中核となって活躍している姿を見ると、とてもうれしくなります。しかしここでは、それらの方々にはまことに失礼ながら、彼らが新米先生だったころをふり返り、新米先生が悩みがちな、問題行動の多い子どもに対する指導のあり方について考えてみたいと思います。

○子どもの「あるがまま」を見つめよう

一番感じるのは、新米先生は得てして自分が幼少のころから経験してきた環境に支配されやすいということです。いえ、それしか知らないのですから、当然なのかもしれません。親や教師からきびしく育てられた新米先生は、子どもにもきび

しくしがちです。反対に、何でも許してもらえぬ環境で育てられた新米先生は、子どもにも甘くなりがちです。

また、次のようなこともいえるでしょう。教職に就く者は、幼い時から「いい子」だった方が多いのではないのでしょうか。周りがきびしくても甘くても、素直にいうことを聞いたのではないのでしょうか。事実、問題になるような行動をとることはあまりなかったと思います。そのため、「子どもには言うって聞かせればよい。それでよくなるはず」と思ってしまう新米先生もいるようです。

しかし当然ながら、学級にはいろいろな子どもがいます。愛情に恵まれない子どももいるでしょう。野放図に育てられている子どももいるでしょう。そのため、きびしく接すると、萎縮してしまったり反抗的な態度に出たりする子どももいるのではないのでしょうか。また、甘く接すれば勝手気ままにふるまう子どももいると思われれます。

教壇に立ち一か月くらい経つと、子どもも教師もお互いに気心がわかってくるので、当初の緊張感は取れ、地が出てくるもの。そのころから新米先生の葛藤が始まります。「こんなはずではなかった」「どうしていうことを聞かないのだろう」。自分の幼少時代とは違う子どもの行動に戸惑い、悩んでしまう新米先生も少なくありません。

子どもと動き回れる。子どもと感覚がぴったり合う。

それは子どもたちにとって最大の魅力。

「さあ！その若さという武器を最大限発揮しよう」

toshi 先生から新米先生へのエールです。

< toshi 先生プロフィール >

子どもたちと存分に遊んだ新任時代。日々子どもたちの思考の筋道を大切に、授業で子どもをどう生かすかを考える一方で、学級経営や児童理解のあり方に頭を悩ませた修行時代。子ども第一の学校経営を考えてきた校長時代。35年の教員生活を経て、現在は小学校の初任者指導にあたっている。「ある退職校長の想い」「小学校初任者のブログ」を執筆中。

私は思います。自分の経験にない子ども
の姿に直面したら、強引にふるまうこ
とはやめて、まずは子どもをじっくり観
察する気持ちになつたらよいのではない
でしょうか。友達の人格を否定したり、
危険が身に迫っていたりする時は別とし
て、掃除を怠けたとか、友達をからかつ
たとかいうくらいのは、ソフトに対
応したいもの。だからといって何もしな
いというわけにもいきませんから、
「〴〵のようにしたら先生はうれしかった
のだけれどなあ」
「残念。昨日はちゃんとできていたのよ。
頑張ろうね」
というような言葉かけをしたいもので
す。
逆によくないのは、
「なぜそんなことをするの。謝りなさい」
「もう二度としないって約束しなさい」
などというように、頭ごなしに叱ること
です。これでは愛情不足の子どもをます
ます追い込んでしまいます。
子どもは、やってよいことと悪いこと
の区別はついていません。しかし、悪いこ
とだとわかっていてもやってしまうので
す。それは欲求不満だったりイライラし
ていたりするからでしょう。根底には、
その子が愛情に恵まれていないことがあ
ります。ですから愛情が子どもに伝わる
ようにしなければいけません。そのため
には、問題行動は問題としながらも、前

述のように受容の精神でいきたいもので
す。

○子どもの長所を見取る努力を

どんな子どもにも長所はあるのですか
ら、日ごろからそれを見取る努力も大切
です。

例えば、乱暴だが機嫌がいいとやさし
い時もあるとか、がさつだが自分の気に
入ったことはていねいにやるとか、それ
以外でも、ちつとも宿題をやらないけれ
ど、その日はたまたまやってきたとい
うことでもよいでしょう。

そうした折々に、うんとほめたり喜ん
だりしてやることです。問題行動の多い
子どもは、子ども自身が感じ取れるような
愛情をふり注いでやる必要があります。
そうすることは、子どもに自信をつけさ
せ、自己肯定感を育むことにもつながり
ます。

冒頭でも少しふれましたが、自分が経
験してこなかったことはなかなか身につ
かないものです。先輩からの指導があつ
ても、ついうっかりしたり忘れてたりし
がちではないでしょうか。

しかし、あせる必要はありません。こ
れまでの経験は空気のように自然に身に
ついてしまったものだけに、自分を変え
ていくのは並大抵のことではないでしょ
う。ですから、初めは子どもの反応を見



ながら、「あつ。いけない。またやっちゃった」と思うだけでもよいのです。それでも無反省に生きていくのと比べれば、うまくいった経験も増えますので、長い間にはかなり違ってくるはずですよ。
いよいよ教職二年目に入りますね。新たな子どもたちに新鮮な気分で臨みたいものです。一年目とはまた違った、味のある学級経営ができるようになるのではないのでしょうか。